

巻頭言

ご挨拶

病院長 三木真司



三菱京都病院医学総合雑誌第22巻発行に当たり、ご挨拶申し上げます。

本誌は1994年の創刊以来、毎年1回の発刊を重ねてまいりました。編集の労をお取りいただきました編集委員長ならびに編集委員の方々、さらには貴重な投稿をいただきました著者の皆さま方に厚く御礼申し上げます。

さて当院は本年12月1日に待望の緩和ケア病棟を開設しました。2011年に京都府よりがん診療推進病院の指定を受けて以来、当院ではがん診療体制の充実を鋭意進めてまいりました。この5年の間に呼吸器外科による肺癌手術の開始、ブレストセンターの整備、PET-CTの導入などを行ってきました。そして私たちの目指すがん診療の最後のピースとして、緩和ケア病棟を開設した次第です。12月6日には緩和ケア病棟開設記念の講演会を開催し、京都大学附属病院緩和ケアセンター／緩和医療科の恒藤暁教授に「我が国の緩和ケア病棟の現状と課題」と題して特別講演をいただきました。引き続いて開催しました内覧会には110名あまりの参加をいただき、京都市西部～乙訓地域では初めての緩和ケア病棟としての大きな期待をひしひしと感じました。

我が国のがん死亡者数は年間38万人ですが、緩和ケア病棟で亡くなる方は年間3万9千人でがん死亡者の10%に過ぎません。一般の方を対象としたアンケートでは、がんになった場合に最期を過ごす場所として緩和ケア病棟を希望される方が最も多く47%を占めています。現状は希望者の2割しか緩和ケア病棟に入院できておらず、緩和ケア病棟がまだまだ不足しているのは明白です。

また、緩和ケア病棟に入院する患者はがん、またはAIDSの方に限られていますが、重症心不全などがん以外の疾患で緩和ケアを必要とする患者が多くおられます。「非がん」に対する緩和ケアが現在大きな課題となっています。緩和ケア病棟で働いているかどうかにかかわらず、医療者全てにとって緩和ケアのマインドとスキルは必須のものになってきています。従来の“治す医療”から“支える医療”へのパラダイムシフトが生じている現在、私たち全員が緩和ケアへの理解を深めることが求められています。

今年も病院職員の海外での学会発表が相次ぎました。腫瘍内科緩和ケア内科の平本秀二医長、心臓内科の横松孝史副部長、櫛山晃央医師がそれぞれ海外の学会で発表されました。海外の学会で積極的に発表することは、当院のチーム医療の質の高さを示しています。今後は学会発表を論文化していただくことを期待します。

最後に、今年8月に当院は4回目となる病院機能評価を受審し、11月に一般病院2の認定をいただきました。今回の受審は内容にもこだわり、全項目A評価以上を目指しました。残念ながら5項目のみB評価でしたが、残りの84項目はA評価以上をいただき私たちの目指す医療の質を評価していただくと感じています。この雑誌を通じて当院のチーム医療の質がさらに向上することを願って巻頭言とさせていただきます。

2015年12月